

新たな地で新たな取り組み

片岡 真紀子 さん

雪国でもバナナは作れる!?

雪が多い年には2mも積もる豪雪地帯の戸沢村。そんな戸沢村で、熱帯地域原産の果物、バナナが栽培されており、その名も「雪ばなな」という。

雪ばななを栽培しているのは、もがみ中央農業協同組合の片岡真紀子さん。片岡さんは兵庫県神戸市出身。山形県には鮭川村の地域おこし協力隊として移住し、地域おこし協力隊の任期終了間際、もがみ中央農業協同組合から、雪ばななの栽培について声かけがあった。「バナナ栽培なんてできる機会はない」と挑戦を決めた。

バナナ栽培をするうえで株分けの作業はとても重要である。一株から何十株も子株が出てくるが、3本くらい残し間引く。そのままだと栄養が分散し実が小さくなるなど影響がでるからだ。また株の寿命が3〜5年のため、真夏の株の元気な時期に株分けし、植え替える用の株を取っておく必要がある。

もがみ中央農業協同組合がバナナ栽培に取り組み始めたのは、「岡山県で温室栽培によりバナナ栽培を行っている」という情報を得たことがきっかけ。沖縄県から苗を取り寄せ、2017年に栽培を開始した。当初は想定外の低温等に見舞われたが、結実を実現させ、2019年にやっと販売が開始された。

片岡さんは雪ばななを戸沢村の新たな特産品にしたいと思い、様々な県内のお店とコラボし、プリン等を販売してきた。今後はアイスやジェラートなどの新たな加工品を見込んでいると語った。



栽培ハウス内の様子

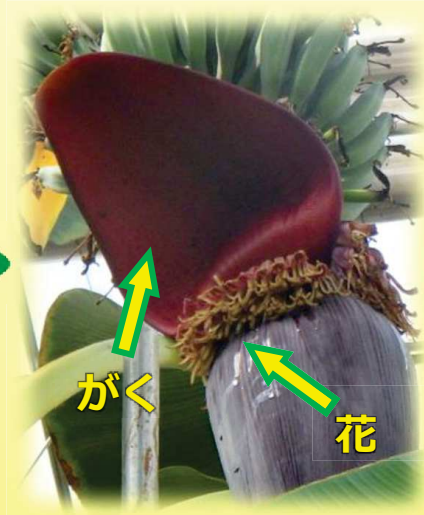
雪ばなの栽培過程

▼苗



- ・苗が1mほどになったら株分けを行う。
- ・雪ばな栽培ハウスには、鉢植えも含め、約120株が存在している。

▼花



- ・葉が40枚ほど展開すると出蕾し、中の実が成長するにつれ、がくが開く。さらに実が大きくなると上に反り、がくが落ちる。

▼実



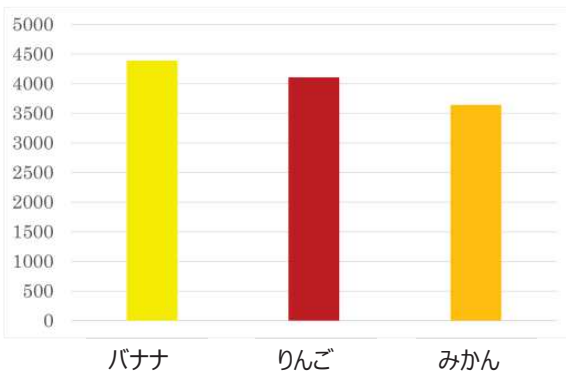
- ・株分けを行ってから、約2年で収穫！但し、温度変化によって収穫のタイミングが大きく左右されるため、収穫時期は不定期である。

バナナ絶滅の危機？

バナナは、果物の中で、一世帯あたりの消費量がトップでありながら、その99.9%以上を輸入に頼っている。そんな中、バナナを枯らす病原菌が原産国で猛威を奮い、近い将来、絶滅するのではないかと懸念されていた。

近年では日本各地でもバナナ栽培が進んできており、近隣では岩手県、福島県でも栽培が行われている。

1年間に1世帯が支出する金額の多い果物



(出典) 総務省家計調査 (R2年)

最高の仕上がりが「雪ばな」の加工品



2種の雪ばなケーキ



そのまま食べてもおいしい雪ばな。最近では、雪ばなを使用したコラボ商品も色々出ている。



雪ばなプリン

「雪ばな」の名前は知事の案



温暖な南国産のイメージが強いバナナを雪国の新名物にしようという思いがあり、吉村美栄子知事へバナナ栽培のご説明をした際に「雪ばなでどうでしょう」とご提案いただいたことから、雪ばなと名付けられた。

雪ばな栽培ハウスでの様子や、販売情報は Facebook、Instagram をチェック！「いきいきランドぼんぼ館」、「産直さけるくん」地域のイベントで販売されることもあり、立ち寄った際に出会えたらラッキー！



是非
フォローしてみても
いかが？